

先生お薦めの一冊

『どちらが彼女を殺した』

東野圭吾 著 (講談社)

英語科 廣瀬 裕二 先生

最愛の妹が殺害された愛知県豊橋署に勤務する兄・和泉康正は、独自の“現場検証”の結果、容疑者を2人に絞り込む。1人は妹の親友、もう1人はかつての恋人。妹の復讐に燃え、犯人を追い詰める兄の前に現れたのは、練馬署の刑事・加賀恭一郎。真犯人は男か？女か？読後感も謎が残る、究極の「推理」小説です。

東野圭吾氏は大阪府出身で、大阪府立大学電気工学科卒業後に生産技術エンジニアとして会社勤務の傍ら、ミステリーを執筆。『放課後』で作家デビューを果たしました。デビュー直後は『卒業』や『学生街の殺人』など学園を舞台にした作品が多く、『同級生』は自分(=廣瀬)が好きな作品の一つです。

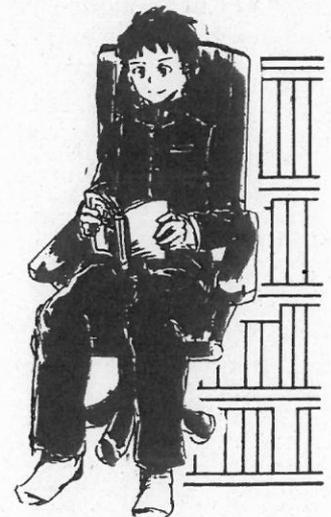
その後は周知の通り、密室推理や脳科学、生命や人間心理など理系出身の特性を生かした作風へ展開しながらも、自身を「似非理系人」と称しての軽妙な随筆や「スノーボードおじさん」を自認する筆者の趣味も兼ねたエッセイや『白銀ジャック』、『疾風ロンド』などのスキー場を舞台にした作品。『白夜行』や『幻夜』などの長編を執筆したかと思えば、大阪の小学校教諭・しのぶ先生が主人公の痛快推理小説、練馬署の刑事・加賀恭一郎や帝都大学の湯川学物理学准教授・ガリレオ先生を主人公にしたシリーズなど、TVドラマ化や映画化された作品は数知れず、『容疑者Xの献身』や『ナミヤ雑貨店の奇蹟』での各賞の受賞は記憶に新しいところです。「東野圭吾は、一体何人存在するのか？」と思えるほど、多岐にわたるテーマで膨大な数の作品を発表し続けている著者は才能が枯渇しないのかと、驚嘆する思いで自分(=廣瀬)は新作を待ち続けています。

出水高校の勤務時代、大口高校でも同僚であったS女史(国語)から、「廣瀬さん、東野圭吾って作家知ってる？この作品面白いよ。最後まで読んでも、結局誰が犯人なのか、よく分からなかったよ。」と言って渡されたのが、この作品でした。正直、自分(=廣瀬)も真犯人が誰だか分からず、読み終わってもすっきりしませんでした。しかし、著者・東野圭吾氏と主人公・加賀恭一郎に強く惹かれたことを、今でも鮮明に覚えています。東野圭吾氏の世界に引き込まれる切っ掛けとなった作品との出会いでした。

自分(=廣瀬)は高校時代、部活動に熱中して読書どころではなく、何かに追われているような、余裕の無い生活を送っていたように思います。読書など、長期休業中に国語の課題で感想文が出た時にだけ課題図書を読んでいる有様で、文学史の試験前に読んだこともない作品名と作者名を必死に覚えるような、間抜けな高校生でした。教職に就いてからも野球や教材研究に追われ、忙しさを理由に読書を怠っていました。

大口高校の勤務時代、博学で尊敬する年配のK先生(故人)が、寸暇を惜しんで読書しておられました。その姿勢に感銘して、どんな本でもいいので、とにかく本を読むように心掛けることにしました。文学作品とかではなく、軽い内容のものばかりでしたが、以来常に文庫本を携帯し、気がついたらいつでもどこでも、わずかな時間でも「本を読む習慣」が身につけていました。

読書をする小論文に役立つからとか、文章力がつくからとか、そんな理由で力説している訳ではありません。読書は「心や人生を豊かにする」それだけです。自分(=廣瀬)は、恥ずかしながら30歳を過ぎてからそのことに気づきました。現在はワンクリックで何でも購入できて、瞬時に地球の裏側からの情報が受信できる時代です。確かに電子書籍は便利ですが、本には電子書籍では味わえない感動や出会いがあるように感じます(廣瀬説)。卒業目前の53期生を始めとして、1人でも多くの鹿児島中央高校生に、本の頁をめくって、新しい世界観が広がる素晴らしい体験を大切にしたいです……。



1月の貸出統計

1年31冊 2年29冊 3年355冊 合計415冊

学年組	1年								2年								3年							
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
貸出数	7	1	1	9	3	2	5	3	0	2	8	0	4	2	9	4	7	11	43	10	118	18	57	91
合計	31冊								29冊								355冊							

今年度よく読まれた本

- 『わかりあえないことから』平田 オリザ 著 (講談社)
- 『コミュニケーション力を引き出す』平田 オリザ 著 (PHP 研究所)
- 『君の臓腑をたべたい』住野 よる 著 (双葉社)
- 『か「」く「」し「」ご「」と「」』住野 よる 著 (新潮社)
- 『キャラ化するニッポン』相原 博之 著 (講談社)
- 『デフレの正体』藻谷 浩介 著 (角川書店)
- 『コミュニケーション力』齊藤 孝 著 (岩波書店)
- 『聖路加病院訪問看護科』上原 善広 著 (新潮社)
- 『看護』増田 れい子 著 (岩波書店)
- 『犬が来る病院』大塚 敦子 著 (KADOKAWA)



今年度の「貸出ベスト10」の書籍は、ほとんどが小論文関係の本でした。特に今年度は、コミュニケーションに関する本の利用が目立ちました。社会学部だけではなく、看護師や教師をめざす3年生にも読まれていました。

本校図書館の利用で最も多いのは、資料収集です。これは学校図書館の大切な役割です。しかし、資料収集だけではもったいない！読書を楽しむことも忘れないでください。廣瀬先生も書かれています。読書でしか味わえない素晴らしい感動を大切にしてください。

遅読のすすめ

「遅読」という読書の方法を聞いたことがありますか。「速読」や「黙読」・「音読」という読書法はよく聞きますが、「遅読」という読書法はあまり聞いたことがありません。しかし、『遅読のすすめ』（山村 修 著 新潮社）という本まで出版されていますので、ひとつの読書の方法であることは確かです。

遅読とは、「じっくり」・「ゆっくり」・「精読」・「熟読」することではないでしょうか。知らない言葉が出てきたら、辞書を引く。知らない地名が出てきたら、地図で確かめる。登場人物の気持ちになって読む。なぜだろう・・・という疑問を持ちながら読む。作品の奥にあるものを理解するように読む。犯人が気になる推理小説などには向かない読み方かもしれませんが、じっくり読むことで謎解きの伏線につながるかもしれません。

先日、本校のある先生が「読書には訓練が必要・・・」とおっしゃいました。確かに「そうだ」と思いました。今、3年生が小論文対策で新書本を何冊も何冊も読んでいます。最初は読みづらいと感じる新書本も、慣れてくることでどんどん読めるようになります。内容も理解できるようになります。そして、自分自身で本を探せるようになります。まさしく、訓練の賜です。そして、いつしか速読でありながら熟読できるようになっていきます。

例えば、物語を読む時、意識して「じっくり」・「ゆっくり」読んでみましょう。分からない言葉は辞書を引く。助詞や助動詞にも気をつけて読む。すると、その物語は奥へ奥へと広がっていく・・・。読書は訓練です。



編集後記

3年学年主任の廣瀬先生の熱き思いのこもった「先生お薦めの一冊」いかがでしたか。東野圭吾の面白さと、読書の楽しさが伝わってきました。そして、何より読書の大切さを教えていただきました。ありがとうございました。

春は別れと出会いの季節です。高校時代に何を学び、何を考え、何を語り、そして何を学びましたか。いつの日か、高校時代に読んだ本を、懐かしく思い出す日が来るかもしれません。鹿児島中央高校で学んだことや考えたことは、皆さんのどこかにきちんとインプットされているはずです。そして、それこそが皆さんの底力の源になっていくに違いありません！

